



まず考えたことは、「視点」とは何かということです。「視点」には“視線の注がれるところ”“物事を見たり考えたりする立場”といった意味があります。言葉の意味から、私たち保育教諭の視点とは、子どもの姿を見て、考え、より良いことを伝えていくことだと考えました。

大切にしている3つの視点の1つ目は、「子どもらしく伸び伸びと育つ」です。近年は公園や空き地が減ってきていることから子どもが伸び伸びと遊べる場所が減ってきているのではと感じています。私が子どものころは、急な斜面を駆け上ったり、田んぼでおたまじゃくしを捕まえたり、周囲から丸見えのところに勝手に秘密基地を作ったりと自由に遊んできた思い出があります。今の子どもたちには遊ぶ所が少ないわりに、ゲームやメディアが多く、それにとらわれがちではないのかと感じています。だから教育保育の中では、子どもながらに思う疑問や発見するわくわく感を味わってほしいと思っています。以前空を見ていたら「先生、空に線が描いてあるよ」と言ってきた子がいました。それは大人が見るとただの飛行機雲でしたが、子どもたちから見ると何とも不思議な線で、それが何かもわからなかったから私に伝えてきたんだと思います。こういった子どもらしい観点を大切に、一緒に知っていくことで伸び伸びと育ってほしいと考えています。

2つ目は「周囲の人と思いを交わす」です。私は保育教諭になってから乳児クラスを担当しているので、子どもが周囲の人に興味を示した瞬間をたくさん見ることができています。特定の保育教諭にばかり甘えたり、無茶を言ったりする子もいましたが、それも子どもが周囲に興味を示す過程の一つだったのではと感じています。「私が大好きな大人と遊んでいるその子は誰？」という思いすら持っているのかもしれませんが。そうした興味から、他者への関心が深まっていくので、大切にしたいポイントの1つです。人格の土台は3歳ぐらいには決まってくると言われていて、生まれてからのたった3年間で、その子の人生が決まってくるということです。だからこそ周囲の大人から愛情を受け、自己肯定感を高めた上で、友だちとのトラブルを経験したくさんの思いを知ることが大切なのではと考え、子どもたちと関わっています。

3つ目は「自分の力を信じる」です。年齢によって内容は大きく変わってくると思いますが、「できない」という思いを持ってほしくないと思っています。巧技台から飛ぶことが怖かった女の子、はしごが渡れず「先に行つて」と友だちに行ってもらった男の子。「自分はできない」という思いがある子には決まって「先生と一緒にいてできないことはない」と言ってきました。私もこう言った以上とことん付き合う気ですが、その言葉に安心するのかすぐに勇気を出す姿も多く、さりげなく援助しても「自分でできた」という思いを持ち喜ぶ姿もたくさん見えました。服がうまく脱げない、靴が履けないなど子どもたちが日々格闘していることは、大人が思うより多いのかもしれませんが。保育教諭の言葉を信じて勇気を出すことが自分の力を信じることに繋がるのではと思い、“自信を持てるようにする魔法の言葉”をいつも探しています。

以上3つの視点を大切に、これからも私らしい教育保育ができるように頑張ります。まだまだ未熟で、勉強をすることがたくさんありますが、子どもたちの為にも自分に自信を持っていきたいと思っています。

(2019年2月)

